

府立箕面支援学校 「学校協議会」 報告書（第3回）

日 時	平成27年2月26日（木） 10:00～11:40（校長室にて）			
出席者	協議会委員	職名等	学校事務局	校務分掌等
	藤江 康彦	東京大学大学院准教授	大角 正弘	校長
	兼平 高子	大阪府池田子ども家庭センター 心理総括主査	早野 眞美	教頭
	阿久根 賢一	社会福祉法人「福祥福祉会」 理事	伊藤 倫隆	教頭
	岡本 民江	吹田市立わかたけ園長	山崎 静一	事務長
	村田 文代	平成25年度本校PTA 副会長	坂田 隆志	首席、事務局長
			西森 勢記	首席、自立活動部長
	(欠席者)		植野 耕司	首席、コーディネーター
	吉田 和史	箕面市立萱野東小学校区 「青少年を守る会」会長	大竹 敦久	中学部主事
おもな テーマ	「授業アンケート」 「学校教育自己診断結果と本校の課題について」 「学校経営計画について」			
協議内容 の概略	1. 学校長挨拶 2. 「平成26年度学校経営計画」に基づく主な取り組みと評価 ①授業アンケートの集計結果報告 ②学校教育自己診断の集計結果と本校の課題について ・学校教育自己診断（教職員向け）集計結果報告 ・学校教育自己診断（保護者向け）集計結果報告 ③「平成27年度学校経営計画」について 3. 上記取り組みに対する質疑応答、提言等 4. 事務局より諸連絡			
質疑応答 ・ 提言等	① <u>「授業アンケート」について</u> <事務局A> ・集計結果の報告			

質疑応答 ・ 提言等	<委員A> ・保護者の記名欄があり、提出したのがどの保護者かすぐにわかってしまうので出さない保護者も多いのではないかな。 ・特に高等部で「思わない」（否定的）の回答数が多い気がする。「どの授業」「どの教員の授業」「どの生徒の保護者が」記入しているのか、といった情報は把握できるものなのか。 ・例えば、内部からの進学者と外部からの入学者とで、保護者のニーズの違いがあるといった要素も影響があるのではないかな。 ・当該授業担当の教員への指導はできているのか。 <事務局A> 教職員の授業力向上・指導については「評価・育成システム」に則って個別面談等を活用している。 <委員A> 様式は決まっているのか。 <事務局B> ・原型は高校の様式を元にして作成している。支援学校の場合は、検体数が少ないので（トンプソン検定）どのように数値化・評価できるのかといった課題が大きい。 ・教員の指導力向上のためには「厳しい意見」も必要だと感じる。保護者も我が子の成長が見えにくい……。支援教育は数値化しにくいので、評価することが非常に難しいという実感がある。 ・本校として、①「キャリアプランニング・マトリックス」の活用で評価を数値化すること、②自立活動について「指導の自己評価システム」（北海道で実践されている）の導入を視野に入れている。 ・保護者として、特に重度心身障がいのある子どもの発達が見えにくいので、成長を何らかの形で「可視化」していただけるとありがたい。 <委員B> ある項目について、なぜそう思うのかという理由を「自由記述」する欄はあるのか。アンケートの様式・聞き方を工夫すれば、そう答えた理由や要因等を知ることができるのではないかな。 <事務局A> 自由に記述する項目は設けていない。ただ、実際には、いろいろと具体的に記述されている保護者もいる。 <委員A> 教員はこのアンケートの結果を全て知っているのか。授業改善のためには知ることが大切ではないのか。 <事務局B> 保護者からご意見をいただけることは本当にありがたい。ただ、統計的なものは公表できるが、個々の教員に対する意見、保護者の個別的な意見の部分は個人情報の観点等、様々な制約があって全て公表することはできない。例えば、今回の授業アンケートも同じ保護者が複数提出されているということも事実と思う。 ② <u>学校教育自己診断</u>について
---------------------------	--

質疑応答 ・ 提言等	<事務局A> 集計結果の報告 <u>《保護者向け》について</u> <委員A> 項目 35, 36（放課後、長期休業中の学校活動）について、放課後等児童デイの充実に伴って、保護者の負担感が減っているのに、依然として否定的意見が多いのは疑問である。 <事務局B>学校としての姿勢が問われての回答と受け止めている。学校施設の開放等は積極的に行っている。 <委員C> 項目 17, 27（進路に関わる項目）について肯定的回答が下がっている点について、子どもに合った進路指導の実際はどうなっているのか。 <事務局A> 進路指導担当の教員はよく動いている。ただ、学年担任団や保護者とのパイプを太くして連携を取りながら進めていくことが継続的課題である。 <事務局C> この間、「進路先の開拓」に力を注ぎ、本当に色々な選択肢が増えてきた。一方で、子ども・保護者のニーズに応えるために「実習」が増え、教員の実習先への付き添いが増えており、日常の授業に支障が出ている現状も多い。 <事務局D> 小・中学部と高等部とで、「進路」の捉え方・ニーズが違うことも肯定的回答が減っている要因のひとつではないか。 <委員C> 項目 27（進路に関わる項目）の回答「わからない」が多い。保護者に対して、進路に対する「状況説明」（情報の提供・開示）がもっとあれば、先への見通しが少しずつ明らかになり、減らせるのではないか。 <委員A> ・保護者にとって、「進路指導」という言葉やイメージが漠然としているのではないか。 「行きたいところに入れるようにする指導」なのか、「確実にどこかに入れるようにする指導」なのか。「進路指導」の捉え方は三者三様ではないかと思う。 ・現実として、特に重度心身障がい子どもたちの「行き先がない」ということもある。 <事務局B> 子どもたちの実情に即して、「進路サポート」と「進路指導」とを区別して考えていく必要があるのかもしれない。「進路保障」という観点で、学校から行政等への働きかけをしている。 <事務局C> 就労支援という観点で、「面接指導」「マナー指導」等をする生徒もいる。学校として何をメインにするのが重要であると感じている。 <事務局D> 小学部6年間、中学部3年間の9年間は常に進路とつながっており、生きる力のボトムアップとなり、高等部の3年間で進路を決めていくことにしっかりとリンクしてい
---------------------------	--

る。

<委員D>

質問項目の文言を具体的なものに工夫することで、回答が得やすくなるのではないかな。
今後工夫していただきたい。

《教職員向け》について

<委員D>

全体的に「わからない」が目立っている。そのために肯定的意見が減少しているのではないかな。質問項目は昨年度と同様なのか。

<事務局A>

昨年度と全く同じ項目である。ただ、今年度は新しい教員が多い。

<事務局B>

教員の実態として、今年度は講師率がとても高い。

<委員A>

小学部の講師率の高さが際立っている。中でも、小学部の1年生は特に新しい教員が多い。経験の豊富な教諭を同じ学年に固めてしまうと他の学年が厳しくなるという現実もあるだろう。教諭と講師とで、研修体制等に違いはないのか。

<事務局B>

教諭も講師も同等に研修実施している。非常勤講師については勤務時間等の制約があり研修等の実施が難しい。

<委員A>

特に学部1年生は保護者からの厳しい意見が多いのではないかな。学校の1年目で学部・学校のイメージができあがってしまうのも事実と思う。

<事務局B>

実際に、各学部の1年生で変化の大きい時期では特に厳しいご意見が多い。

<委員D>

教職員の分布や集計データの傾向としては、他の支援学校でも同じような傾向があるといえるのではないかな。だからといって何もしないでよいということではないが。単年度だけの評価ではなく、3年以上の長期的な視野でも評価していくことが大切ではないかな。

<委員E>

今年度、創立30周年記念行事があったことで、教職員間で子どもたちのことを話し合う時間や担任業務に負担が生じていたということは考えられないかな。

<事務局B>

確かに、大きな行事を成し遂げるには多大な労力が必要である。ただ、大きな行事を成功・達成させることで得られる教職員の満足感も非常に大きい。

<委員D>

外部からの人材活用は充実しているのか。

<事務局B>

・福祉医療人材活用や、事務補助員の時間数増、学生ボランティアの活用等はあるが、
常日頃からの外部人材活用という観点では、なかなか充実しているとは言えない現状

である。

- ・外部人材の活用、校務分掌のスリム化だけでは解決できない問題があるのではないか。やはり、「新しいことをするときには旧来のものを一つやめる」といった、スクラップ＆ビルドの視点での業務整理が肝心になってくるのではないかな。

③ 「平成 26 年度学校経営計画の評価」「平成 27 年度学校経営計画」について

<事務局 B>

新しい取り組みの説明

<委員 A>

「人工呼吸器生徒への対応」という点で、小学部には人工呼吸器で、スクーリングも継続的に実施している訪問籍の児童がいる。学校としての対応（扱い）は同じなのか？

<事務局 B>

扱いは違う。今回、大阪府として初めてのケースになる。小学部の対象児童の保護者には説明してご理解いただいている。

<委員 A>

「豊中支援学校との連携強化」の項目について。高等部で入学してくる知的障がい生徒の保護者の中には「ここは肢体不自由の支援学校だから仕方ない」と失望・あきらめ感を抱く方も多い。

<委員 D>

- ・「コンテスト」という文言が少し馴染まない気がする。例えば「博覧会」という名称でもよいのでは。
- ・「シラバスの作成」に当たっては、教員個々で取り組むのではなく、何らかのチームとして作成することが大切である。

<兼平委員>

家族支援の充実の項目で「相談専任者の配置」とはどういったものか？

<事務局 B>

現在、リーディングスタッフが各学部 1 名ずついる。それに各学部からの首席 3 名とで協同し、情報をデータベース化して地域関係機関との情報協同支援システムを構築したい。

<委員 C>

- ・「進路指導の充実」の項目で、もう少し具体策が記載されているとよい。例えば、進路情報公開、ホームページの活用等が考えられる。
- ・進路指導に当たっては、就労先（事業所等）の意識改革も重要と感じている。受け入れ先側の「意識改革」「体制の強化」をするために、学校としては「コンサルテーション的役割」も必要になってきていると感じる。

<事務局 B>

大阪府の支援学校でも、「地域支援センター」を校内に設置し、地域の施設や医療福祉機関と連携しているところもあり、参考にしていきたいと考えている。